

「ナガサキ」を語りなおす：スーザン・サザード  
『ナガサキ 核戦争後の人生』

高田, とも子

<https://hdl.handle.net/2324/7332321>

---

出版情報：pp.244-258, 2019-09-17. 彩流社  
バージョン：  
権利関係：



14

「ナガサキ」を語りなおす

—— スーザン・サザード 『ナガサキ 核戦争後の人生』

高田 とも子

TAKADA, Tomoko. "Restorying Nagasaki: Susan Southard, *Nagasaki Life after Nuclear War*"

## はじめに

二〇一五年八月、一人の米国人によって、長崎原爆について描かれた作品が米国で出版された。『ナガサキ 核戦争後の人生』(Nagasaki Life After Nuclear War, 2015) は、被爆当時未成年であった五人の人物に焦点を当て、彼らが被爆から現代にわたる人生をいかに生きてきたか、一二年にわたる綿密な取材に基づいて執筆された大著である。著者のスーザン・サザード (Susan Southard) は、日本へ留学中の一九八〇年代中盤、長崎の原爆資料館を訪れたことを契機に、後にピーター・タウンゼント (Peter Townsend) による『長崎の郵便配達』(The Postman of Nagasaki, 1984) のモデルとなる被爆者、谷口稜睡への聞き取り調査を開始する。調査対象は次第に他の被爆者へ広がり、彼らの被爆後のライフ・ストーリーに加える形で第二次世界大戦下の日米資料が参照されながらまとめ上げられたのが、本作『ナガサキ』だ。発表から翌年の二〇一六年までに、二つの大きな文学賞を受賞しており、そのうちのひとつ、デイトン平和文学賞の受賞スピーチにおいて、サザードは広島・長崎の表象を巡る議論に触れ、以下の言葉を残している。

彼ら(被爆者)の苦しみは、今日においても、広島と長崎の空に立ち上った原子雲のイメージによってかき消されていくし、原爆使用を巡る白熱した議論の中で、小さいものとなってしまっています。

また、本作の序章では、広島・長崎への原爆を巡る米国側の言説の歴史について、以下のような内容を述べている。

米国側の文書では、核使用の是非を巡る論争が多く、証言を中心とした資料はあまりありません。例外的に、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』がありますが、これは原爆直後の被爆者の様子にフォーカスしており、被爆か

らの長い年月を、被爆者たちがどのように生きてきたのか、というライフ・ストーリーに注目した文献はほとんど見られません。(8)

これらの証言には、米国の文化的・社会的・政治的文脈のなかで「原爆」が語られる際の示唆に富む論点がいくつつか隠されている。まず、「原爆」が文化と結びつく際、広島・長崎への原爆投下、およびその余波と被害は「きのこ雲」や「終末論」といったイメージの下に記号化され、被爆者の苦しみや痛みへとまなざしが向けられてこなかったという点。もう一つは、ヒロシマ・ナガサキを巡る言語空間では、原爆使用そのものが正しかったのか、という政治的論議が支配的であったという点である。原爆を巡る米国の語りの場におけるこれらの限界を乗り越えることが、『ナガサキ』の目指す到達点であるといえるだろう。

しかし、これに関連して考えたいのが、二〇一五年以前にも、欧米圏において「ナガサキ」が語られる際の「限界」を乗り越えようとする試み、すなわち、被爆者を視点人物に据え、長崎原爆の物語が語られるという流れが存在している様をみてとることができるという点だ。こうした背景があってもなお、被爆者の「生」は米国で語られてこなかったとサザードが述べる際、この言葉の意味を今しばらく考えてみる必要がある。この点については、『ナガサキ』に関する各誌書評、また文学賞受賞の際の選評を参照したい。以下はそれぞれ、イアン・ブルマ (Ian Burma) による『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された書評、デイトン平和文学賞の選評である。

サザードの著書の力強さは、あいまいさがまったくない点にある。(中略) 細かな数字ではなく、彼女は『ヒロシマ』を書いたハーシーのように、個々人の運命に焦点を当てている。(中略) 戦時下における日本の行いを批判することなく、日本の被爆者へ共感を込めて執筆していると同時に、第二次世界大戦後における米国の欺瞞に対する怒りを表現している。(New York Times, July 28, 2015)

『ナガサキ』は、ジョン・ハーシーが一九四六年の『ヒロシマ』で終わらせたところから始まっている。(中略) 原爆投下の是非を問う議論を越えた、人間による凄惨な暴力についての本であり、暴力が被害者及び加害者にもたらすものを問うている。暴力が蔓延した現代社会にこそ、読むべき本だ。(Ruben Martinez, finalist, judge, 2016 Dayton Literary Peace Prize)

さらにジョン・ダワー (John Dower) は、本作の発表を称え「スーザン・サザードは、ジョン・ハーシーが広島に對しおこなったのと同じことを長崎に對しおこなっている。あるいは、ハーシー以上かもしれない」と述べているが、これらのレスポンスをみる際に注目すべきは、いずれもジョン・ハーシー (John Hersey) によるノンフィクション、『ヒロシマ』(Hiroshima, 1946) との比較が成されているという点だ。とくに、「個人の生」に焦点を当て、被爆者の痛みを表象しているという特徴によって、二者の類似性はとりわけ強調されている。確かに、一九四五～四六年において、被爆地の実情はおもに新聞・雑誌報道に依拠しており、そこでは被爆者不在の言語が顕著であったことは否定できない。しかしそうではあっても、一九四六年発表の『古典』と二〇一五年発表のナガサキの物語が、実に七〇年の歳月を超えて比較されがちなのはなぜなのか。比較されがちなことは、裏を返せば、ハーシーの『古典』以来、被爆者は語られてこなかったということなのか。さらには、広島原爆を語るときの言葉を借りることでは、ナガサキについて語ることはできないということなのか。

第二次世界大戦期以降のアメリカでは、核戦争によって地球が破壊されるという終末的核のレトリックが「主流」として展開してきた。こうした語りは、放射能汚染をはじめとする核の問題を、環境的見地から民衆に喚起させるという点で重要ではあるものの、核のような現代の環境問題を論じる上で必要なのは、ユダヤ・キリスト教的終末思想の解釈を超えたところにある「複数の文化的視点」であることが指摘されている(松永三六一)。サザードは「被爆者とはまったく異なる文化圏に生きながらもナガサキを描く」(一六)という、やや繊細な表現を使い本書執筆の動機

を述べているが、この問題意識は近年のアメリカの核批評・環境批評を巡る議論に一石を投じている可能性は看過できな

きな。以上の問題意識を踏まえ本論は、『ナガサキ』というテキストを手掛かりとし、長崎原爆が言語化・物語化される際に批評空間が抱えてきた問題点と限界について考察すると同時に、長崎の被爆者の「生」を二一世紀において「語りなおす」ことの可能性に光を照らす試みである。

### 一 長崎原爆を巡る言説・批評空間の「不在」

『ナガサキ』の評者として先述した歴史学者ジョン・ダワーは、広島と長崎への原爆投下についてのアメリカ側の認識の仕方には二つの大きな流れがあるととして類型化を図っている。一つが「英雄的で、連合軍の勝利を象徴する」語りに、もう一つが「悲劇的な語り」に代表されるという。ダワーによると前者は、原爆投下を「多くのアメリカ人の命を救うための人道的なおこないであった」として正当化する点に特徴があり、こうした言説はハリー・トルーマンの原爆投下に関する声明文や、一九四七年の、原爆投下によって多くの人命が救われたとする「一〇〇万人神話」の土台となったステイムソン論文に発端がある。一方で後者は、「原爆の犠牲になった人々の視点から、多くの人々を殺戮し、苦しみを与えたことを糾弾」する点にその特徴がみられるという。こうした類型化に加え、ピーター・カズニック (Peter Kuznick) は「終末論」に下支えされたナラティブが米国社会には根強く浸透してきたことを指摘する。この第三のナラティブは、原爆使用を否定する点においては「悲劇的な語り」との共通項がみられるが、原爆の「犠牲者」の射程を全世界に広げ、あらゆる生命体を危険にさらす存在として位置づけている点に特徴があるという。スペンサー・ワート (Spencer R. Weart) やロバート・ジェイコブズ (Robert A. Jacobs) からも指摘しているように、終末論的な原爆の語りの起源は、「恐怖」の対象が「科学」へと向けられるようになった一九世紀後半に遡るが、こうした

土台や参照枠があったからこそ、アメリカでは「恐怖」や「終末思想」が、核を語る際の言語空間へとよりなじみ深い形で滑り込んでいったといえる。

しかし、こうした欧米圏の原爆の語りが「支配的である」として類型化される際、その過程において、ある特定の語りの形が除外され、周縁化されていったという言説史上の力学が考慮の対象とされていない可能性が極めて高い。確かに「ナガサキの物語」は、数量的には充分とはいえないし、読者層も多岐に及んでいるとはいえない。それでも、「ナガサキ」は、欧米圏の言語空間のなかでまったく語られてこなかったわけではない。長崎原爆を描いたテクストとしては、以下のような作品が存在する。

たとえば、米国のジャーナリストであるフランク・チンノック (Frank W. Chinock) はベトナム戦争下の一九六九年、ノンフィクション『ナガサキ——忘れられた原爆』(Nagasaki: The Forgotten Bomb) を発表している。これは原爆投下に関わった爆撃者の視点と、きのこ雲の下で被災した市民たちの声が交互に入り混じった多声的な構成をとるテクストである。タイトルで示されている通り、原爆投下から約二五年経過の段階で、長崎原爆は既に「忘却」という文脈で語られていることが確認でき、二〇一五年にサザードが指摘した長崎原爆を巡る議論と共鳴し合っているという点で注目に値する。一九八四年には、英国の作家であり英国空軍元大佐、ピーター・タウンゼントによって『ナガサキの郵便配達』という小説が英仏両国で発表されている。本作はサザードの『ナガサキ』においても主要登場人物である谷口の被爆体験と、その後のライフ・ストーリーが焦点化される。一九九三年には『サダコと千羽鶴』の著者であるエレノア・コア (Eleanor Coert) による児童文学『ミエコと五つ目の宝物』(Mieko and the Fifth Treasure) また長崎原爆直後に被爆地ルポを執筆し、検閲によって原稿を封印されたジョージ・ウェラー (George Weller) の遺稿『ナガサキ昭和二〇年夏』(First into Nagasaki, 2006) 日系米国人映像作家のステイブ・オカザキ (Steven Okazaki) によるドキュメンタリー作品、『ヒロシマナガサキ』(White Light/Black Rain, 2006) オーストラリアのテレビ・プロデューサー、クレイグ・コリー (Craig Collier) の『ナガサキ』(Nagasaki, 2010) カレン・ステルソン (Caren

Stelson) による被爆少女の物語『サチコ』(Sachiko, 2016) ジョイ・コガワ (Joy Kogawa) の『長崎への道』(Gently to Nagasaki, 2016, 邦訳近刊) などが確認できる。二〇一八年に入ってから、米国の物理学者でナチスによるホロコースト被害者のロアルド・ホフマン (Rold Hoffmann) による絵本『ウツソウ』(Weeds, 2018) にみられるように、著者自身の出自と長崎の原爆被害を接続させる試みを通し、大量虐殺という負の歴史を喚起させ、来るべき未来へその記憶を継承させようとする作品も登場している。

このように、欧米圏の言語空間における長崎の被爆者やその記憶に焦点化した作品は確認できるものの、問題の所在は、これらのテクストが「欧米圏の原爆の語り」という類型から零れ落ちてきたという、ナガサキを巡る批評空間の閉鎖性という点にある。欧米圏の核批評空間でナガサキが語られてこなかったという、いわば「ナガサキの不可視化」には、どのような土台があるのだろうか。この問いに関しては、ジョン・トリート (John W. Treat) 『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』(Writing Ground Zero: Japanese Literature and Atomic Bomb, 1995) 及び二〇一八年のチャド・ディール (Chad R. Diel) による批評書『復興するナガサキ』(Resurrecting Nagasaki) に解答の鍵がある。

トリートは、「ナガサキの不可視化」という現象は、まず日本国内で立ち現れたという点を指摘する。しかしながら、「長崎が歴史の片隅に通常追いやられているのは否定しがたい事実である」と日本の原爆文学における長崎の周縁化について認めつつも(四一六)、長崎の原爆文学作品はその背後に潜むキリスト教と迫害の史実、さらには鎖国体制の中心地であったという都市が運命的にもつ歴史的背景によって、「原爆被害を語ること」の枠組みを超越し、ひいては「生き延びること」の本質的意義について考える一連の作品を生み出した、と再評価を図る(四二二)。原爆被害を都市の唯一無二の特殊性としないことによって生みだされる言説上の「普遍性」は、ヒロシマの原爆文学と一線を画す特性である。これらの背景に保証されながら、長崎はマイノリティへの想像力に支えられた「犠牲の物語」を生み出すことにつながったトリートは結論づけ(四七九)、永井隆、林京子、後藤みな子、佐多稲子によるテクストの考察を通し、惑星を射程に据えた長崎原爆文学の可能性に光を当てる。

ここで重要となるのが、右記の作家たちは「方法や程度は異なるものの、一様に犠牲——過去と未来にわたる——の歴史的な状況に関心を寄せてきた」（四七九）ものの、永井言説に関してはその「特殊な思想」によって他の物語とはかけ離れた存在となっているという点である。この「特殊な思想」とは、具体的には『長崎の鐘』（一九四九年初版、英語版は一九九四年に出版）および『私達は長崎にいた——原爆生存者の叫び』（証言集。英語版は一九五一年に出版）などに確認される、原爆という無差別に人間の生を剥奪する暴力について、キリスト教神学からの応答を試みた思想を指す。この中で一九四五年八月九日は歴史の一点としてではなく、一七世紀のキリシタン殉教という過去にまで遡り、三〇〇年という壮大な歴史的水脈の「帰結点」として位置づけられている（四四九）。

ディールは、日米の原爆言説空間における長崎の周縁化という問題設定をトリートと共有しつつ、永井言説が焦点化されていくことになった背後に潜む力学を歴史的観点からあぶり出す。ディールによると、一九四五年八月九日が一七世紀のキリシタン受難の歴史に遡って拡張される、という永井の壮大な犠牲と救済の物語は、ナガサキを語る際の二つの類型を生み出した。第一点目に、永井言説が普及し、さらには過度に宣伝されていく過程で、他の被爆者によって発せられた被爆の語りが言説史上から淘汰されていったという点が挙げられる。ディールはやや批判的に、この現象を以下の様に述べる。「自称『殉教者』の語りは、他の何千もの被爆者たちの体験にとつて替わられた」（93）。

第二点目に、原爆を父なる神の意志であったとする思想が、原爆投下を巡る米国の関与と責任を回避することにつながったという点だ。これにより、アメリカ当局は永井の思想が、アメリカの核の語りを展開させるのに都合が良いと判断するに至ったという。永井による言説は、本人の意図を遥かに超え、ユダヤ・キリスト教史観に彩られた物語——アメリカが欲望した核の物語——と奇妙な一致をみたということになる（73）。

こうした永井言説の焦点化を巡る議論、そして長崎原爆について書かれた多くの語りが、欧米圏における核言説の類型に組み込まれてこなかったという議論は、ハーシーによる『ヒロシマ』の欧米圏での正典化と問題領域を共にすることが、近年指摘されている。柴田優呼は、二〇一八年の批評書『ヒロシマ・ナガサキを創り出す』（Producing

*Hiroshima and Nagasaki*）におけるハーシーと永井のテクストの類似性を指摘した論考のなかで、「被爆者の物語」といえば、北アメリカでは現在でもハーシーの『ヒロシマ』が正典とされているのは何故なのか」という問いを立てた上で（84）、『ヒロシマ』における語り手の視点と被爆者表象を巡る語りの構造を批評する。柴田によると『ヒロシマ』では、語り手が六人の被爆者たちの運命を周知しているという状況下で物語が進行するが、これにより読者自身も全知の語り手と同じく、鳥瞰的な視点からきこ雲の下で起きた出来事を、いわば「安全な立ち位置」からみることが約束されるといふ（87）。この語りの構造によって保障された主体（語り手、読者）とみられる対象（登場人物、被爆者）という対の構図が成立するなかで、八月六日からの数日間のみが、すでに起こった出来事、すなわち「過去の定点」として、読者が存在する「現在」とは完全に区別されたものとして語られる。『ヒロシマ』の語りと「八月六日」の間に存在するこの隔たりによって、読者は自らが核の恐怖に脅かされることなく、安全に読むことができるのだ（88）。被爆からの数日間、病床に伏せることがあったとしても何事もなかったかの様に日常へと戻っていく登場人物たちの描写によって、放射線被害の長期的影響は隠蔽されており（92）、読者の安全はより一層保障される。永井言説にはこうした点において『ヒロシマ』と同質の特徴が確認されるが、さらに柴田は、とくに際立った類似点として、原爆を神の摂理とし、犠牲を美德とする燔祭の論理が根底に据えられている点に着目した上で（90）、これら二つのテクストが、欧米圏の核言説空間を取り巻く欲望を内面化した支配的語りのあり方であると考察している。

## 二 『ナガサキ』の可能性

欧米圏における原爆の語りが一つの類型に固定されることによって、被爆者の声が反映されないという構図、あるいは被爆体験とは隔たりのある語りの場が一九四五年八月九日からの七五年間で形作られてきたとすれば、サザードの『ナガサキ』は閉ざされた言説空間の壁をどう乗り越え、どのような原爆の語りを展開しているのだろうか。この

問いに關して、まず第一点目に、「一九四五年八月九日」を始発点とし、未来へと続く時系列・歴史的水脈のなかに長崎原爆を位置づけている点、そして第二点目に、ユダヤ・キリスト教史觀と原爆被害を結びつける言説の批判的描写方に注目する。

すでに言及したように、『ナガサキ』は評者たちによって肯定的な反応を得たが、その根拠は「ハーシーのように、個々人の生を描いた」という点にあった。しかし『ナガサキ』では、「個々人の生を描く」という一見すると人道的にみられる方法の下において実は隠蔽されがちな問題が描きこまれることで、ハーシーによる「古典」とは明らかに線を画している。

たとえば、一九四六年から始まった米国政府による検閲作戦の実態が描写されているという点だ。これにより被爆者の証言が封印されてしまったことや、ABCによる被爆者の身体の検証および解剖の顛末、ひいては放射線病が米国側に否定されるまでの過程を明らかにすることを通し、語り手は被爆地・被爆者の実態を巧妙に隠蔽した米国関係者たちの欺瞞を暴く。こうした語り手による「告発」の矛先は、登場人物の証言を借りる形で、一九四五年以後米国で流通したメディア、そしてその報道内容をただ傍観するだけの米国民にも暗に向けられている。以下は、東京在住の精神科医、塩月正雄による目撃談が描かれた本文からの引用である。

「先日、米国のある有名な雑誌を見ていたところ」塩月は一九五二年のことをこう書いている。「一人の患者が、清潔なシートが敷かれたベッドの上で横たわって、シミ一つない白衣を着た医者と看護婦から注射をされている写真を見たのです」。見出しの下には、「原爆被害者への治療風景」とあり、原爆の犠牲者に対していかに素晴らしい医療体制が整っているかという説明が書かれてあったという。「何というばかげた記事なんだ？」と彼は憤った。「原爆被害を受けた都市の一体どこで、こんな綺麗なマットだとか、すぐに動ける医者だとか優しくて美しい看護婦が見つかると思っているのだろうか？ 薬や、包帯や、消毒済みの注射針がどこに残っているというのだ

らう。」(196)

この直後、語り手はハーシーの『ヒロシマ』や報道写真誌『ライフ』が発表されても、結局のところ米国側の政治的思惑によって、米国民の原爆被害への理解は得られなかったと述べる。被爆者への架空の治療風景を創作した「ある雑誌」を巡る塩月の怒りの証言は語り手の声と一体化し、その背後からは、実際の原子野で絶望的な苦しみを味わった谷口や吉田ら登場人物たちとの残酷な対比が喚起される。

実は、この場面に先駆け、原爆投下直後を描いた第二章「フラッシュポイント」において、著者の告発は被爆者たちの身体描写を通しておこなわれている。ここで注目すべきは、『ナガサキ』における主要登場人物たちは『ヒロシマ』の登場人物たちの様な「みる主体」ではなく、「みられる対象」という安全性がまったく保障されていない存在として位置づけられている点だ。たとえばヨシダ・カツジは「体の一部分がなくなった人々や頭が真っ二つに割れて脳が飛び出している人々」の行列に遭遇し愕然としながらも、友人から手渡された鏡の破片によって見た自らの顔も、誰か分からないほどに膨れ上がり、焼け爛れていることを知る(105)。ドウオ・ミネコは、友人たちの驚愕した反応によって、自らが瀕死の重傷を負っていることを知る(106)。さらに、まるで無傷の傍観者としての立場から原子野を眺めていたかのように見えるタニグチ・スミテルが、通りすがりの女性の視点を通し、実は腕から火傷で破れた皮をたらしした他の多くの犠牲者たちとまったく同じ姿であったことが露呈する(107)。登場人物たちが見た原子野の景色は、彼ら自身を映し出す鏡でもある。このことは、もう一人の「見る主体」、すなわち『ナガサキ』というテクストの読者自身をも取り込んでいるともいえるだろう。ここで留意したいのが、サザードが本作の序章で述べているように、『ナガサキ』の想定読者は、「全知の視点」を採用するハーシーの『ヒロシマ』や公式声明を正典として受け入れてきた人々だという点だ。被爆者を他者・対象として「眺めること」が、実は「見られること」と表裏一体だとするこれらの場面は、全知の視点という安全な立場から原子野を語ることが不可視化した人々の苦しみを焦点化することで、そ

の欺瞞を暗に暴いている。『ナガサキ』で描かれる被爆者たちの深く傷ついた身体は、「一九四五年八月九日」を傍観者の立場から眺めることの意味を批判的に問い直すと同時に、平和が訪れたかのようにみえる二〇一五年の社会に対し、「一九四五年八月九日」を、終わることのない永続的かつ普遍的な問題として突き付けているともいえるだろう。

さらに、本章における問いの第二点目と関連し、被爆者個人の証言に散在する被爆とキリスト教信仰を巡るレトリックについて考えてみたい。一九四五～四九年にかけ脚光を浴びた永井隆による原爆の物語が、キリスト教神学と結びつき、燔祭の論理によって長崎の被爆の語りを一つの類型に絞り、その存在を不可視化させた可能性については先述の通りである。『ナガサキ』でも、永井言説が市民の間で拡散し、再生産されていく様子が、被爆者たちの証言・日記・回想を通して描写されている。しかしそこで暗示されるのは、「長崎の人々が信仰してきた神」への懐疑である。以下は、爆心地にある山里小学校に通学していたツジモト・フジオによる手記を含めた本文からの引用である。この手記は、永井隆が編集し、一九四九年に英訳版も出た証言集、『原子雲の下に生きて』からの抜粋であると語り手は説明している。

原爆で両親と兄弟姉妹を亡くした山里小学校四年生のツジモト・フジオは、かつて自宅のあった場所に建てられた粗末な小屋で、六〇歳になる祖母と暮らしていた様子を書き残している。毎朝、祖母はミサに参加した後、浦上川のほとりで、食べ物と交換するための貝を集めていた。祖母はいつもロザリオを身に着けており祈りを欠かすことはなかったという。またすべてのことが、神の意思だと常々言っていたという。

しかしツジモトは祖母ほどに希望をもってはいなかった。彼は以前の暮らしに戻ることを望んでいた。祖母が食料品店を営み、父が井戸掘りの仕事をし、家族が経済的に裕福であった時代に戻ることを望んでいたのだ。「どうか、あの暮らしを返してください……お願いします」彼はそう作文に書いている。「お母さんがほしい、お父さんがほしい、兄弟姉妹がほしい……」(162)

浦上の信徒であると思われる祖母の言動には、永井による燔祭の論理が影を落としている。一方の少年は、自らの不幸な境遇が神の意思であるという思想を受け入れることができない。救済を懇願する少年の姿を通し暗示されるのは、永井が提唱した燔祭の論理への、ひいては、原爆と全能の神を接続させる欧米的核のレトリックに対する懐疑である。ツジモトの手記が挿入されているのは、原爆調査のため米軍関係者の撮影班が長崎入りした一九四六～四八年を舞台とした第五章であるが、そこでは被爆後に一人取り残されて不遇の生活を強いられた孤児や女性、高齢者たちを日常的に目撃したという人々の証言が描かれている。こうした人々の一人であったに違いないツジモトの手記は、原爆の犠牲を神の意思だとする思想が市民の生活にも深く根づいていたことを示す重要な「記録」であると同時に、実はこうした声なき市民の手記が『ナガサキ』というテクスト内で選定されることの影には、ユダヤ・キリスト教史観に支えられた原爆の語りによって周縁化された長崎の位置を巡る、語り手自身の批判的な姿勢が見え隠れしている。

語り手のこうした姿勢は、永井に師事した身でありながら後に燔祭説の批判者となった医師の秋月辰一郎の存在を通し暗示されてもいる。仏教徒の家庭で育ちながらも聖書など他の宗教の本に触れていた秋月は、神の意思や神聖な計画というものが、原爆後に目撃した恐ろしい光景と矛盾していると考えている。キリスト教の神への不信を抱きながら疑いの毎日を送るなかで、勤務先の被爆者であるシスターたちに、原子野を「ただ傍観するだけ」の神への疑問を投げかけるが、彼女たちは一様にキリスト教的犠牲の精神を示すばかりで、秋月の問いへの解答は提示されない(120)。被爆から数年後、秋月はカトリックへ改宗するが、その後も、神の沈黙を前に以下のように問いかけ続ける様が描かれる。

「またあの地獄の日々が訪れて、原爆が私たちを焼き尽くしたとすれば、イエス・キリストは私たちを救ってくれるのだろうか？」(176)

この直後において、秋月が被爆証言活動の立役者となっていく様が描かれるが、ここで指摘したいのは、燔祭の論理に抵抗する、という秋月らの姿や発話の背後に、実は語り手自身の懐疑的姿勢——犠牲と宗教的レトリックを結びつけることへの批判——が垣間見えるという点だ。犠牲をキリスト教的神の意思だとする論理に疑問を投げかけ、八月九日という理不尽な出来事への応答を模索しながら支配的言説の影で苦悶する秋月ら被爆者たちの姿が描かれることは、欧米圏における被爆者不在の核の語りの裏で影を潜め、「類型」から零れてしまった原爆の物語に光を照らすことと、実は同一の構造の内にある。

### おわりに

本論は、「アメリカで語られてきた核の物語の系譜に原爆被害を受けた人々の物語を組み込む」という試みが、実は七〇年の歳月で形作られてきたアメリカの「核の語りの場」の限界を乗り越え、過去七〇年間の言説史に修正を迫ろうとする新たな原爆の語りであったのではないかという点について検討した。被爆証言を日本以外で語ること自体は、決して珍しいものではない。被爆者を中心とした証言活動は大陸を横断してこれまでも成されていることに加え、被爆証言にフォーカスしたテキストがすでに世に送り出されてきたことは本論で言及した通りである。しかし、『ナガサキ』は、原子野を前に絶望し、キリスト教的犠牲の精神に落胆し、救済を求める人々の証言に「操作を加えることを避ける」(Southard, 16) というシンブルな方法に依拠しながらも、実はアメリカにおける核の語りを巡る支配の構造を暴いているという点に特徴がある。ここでは、公式声明や新聞・雑誌報道に代表される、アメリカが欲した核の物語、サザードの言葉を借りるならば、「多くのアメリカ人が受け入れてきた物語」という対抗ナラティブが想定されている。

『ナガサキ』の発表と時を同じくして『ニューヨーク・タイムズ』に寄稿された記事の最後を、サザードは以下のような言葉で締めくくっている。

公式声明は、未だ多くのアメリカ人にとって支配的な意見として根強く残っている。その物語のなかで、長崎の記憶は薄れつつある。しかし、そのようなことがあってはならない。核戦争の生存者の体験を知る時間は限られている。出来事を語りつくすことができたときにこそ、被爆者たちは生を終えることができるだろう。

犠牲への応答を模索して苦悶する人々の物語を、アメリカにおける原爆の語りの場に組み込んでいくことは、「日本の原爆の語り」対「アメリカの原爆の語り」という二項対立的な枠組みを超えるという可能性を、ひいては、不条理な暴力が語られる際に周縁化されがちな語りをもつ力をも、二一世紀に生きる私たちに向かって投げかけている。

\* 校了後のため参照できなかったが、サザードの『ナガサキ 核戦争後の人生』は、宇治川康江訳でみずす書房より刊行されたことを付記しておく。

### ●引用文献

- Buruma, Ian. "'Nagasaki: Life After Nuclear War.' by Susan Southard." *The New York Times*, 28 July, 2015. [www.nytimes.com/2015/08/02/books/review/nagasaki-life-after-nuclear-war-by-susan-southard.html](http://www.nytimes.com/2015/08/02/books/review/nagasaki-life-after-nuclear-war-by-susan-southard.html). Accessed 30 March 2019.
- Coert, Eleanor. *Mieko and the Fifth Treasure*. Puffin Books, 1993.
- Collie, Craig. *Nagasaki*. Allen & Unwin, 2011.

- Diehl, Chad R. *Resurrecting Nagasaki*. Cornell UP, 2018.
- Dower, John W. *Living with the Bomb*, edited by Laura E. Hein and Mark Selden, Taylor & Francis, 1997.
- Hersey, John. *Hiroshima*. Penguin, 1986.
- Kogawa, Joy. *Gently to Nagasaki*. Catlin Press Inc, 2016.
- Kuznick, Peter. "The Decision to Risk the Future: Harry Truman, the Atomic Bomb and the Apocalyptic Narrative." *The Asia-Pacific Journal*, vol. 5, Issue 7, 2007, pp.1-23.
- . "Nagasaki, the Forgotten City." *The New York Times*, 7 Aug. 2015, [www.nytimes.com/2015/08/08/opinion/nagasaki-the-forgotten-city.html](http://www.nytimes.com/2015/08/08/opinion/nagasaki-the-forgotten-city.html). Accessed 30 March 2019.
- Stelson, Caren. *Sechiko: A Nagasaki Bomb Survivor's Story*. Carolrhoda, 2016.
- Townsend, Peter. *The Postman of Nagasaki*. Penguin, 1985.
- Treat, John W. *Writing Ground Zero*. U of Chicago P, 1995. (シモン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く』水島裕雅、成定薫、野坂昭雄監訳、法政大学出版局、二〇一〇年。)
- Weart, Spencer R. *Nuclear Fear*. Harvard UP, 1988.
- Weller, George. *First into Nagasaki*, edited by Anthony Weller. Three Rivers Press, 2006.
- ジェイコブス、ロバート・A 『ドラゴン・テール——核の安全神話とアメリカの大衆文化』高橋博子監訳、新田準訳、凱風社、二〇一三年。
- チンノック、フランク・W 『ナガサキ——忘れられた原爆』小山内宏訳、新人物往来社、一九七一年。
- ホフマン、ロアルド 『ぎっさう』きむらゆういち訳、今人舎、二〇一八年。
- 松永京子 「アポカリプティック・ナラティブの行方——先住民作家と核文学」伊藤詔子、吉田美津、横田由理編著 『新しい風景のアメリカ』、南雲堂、二〇〇三年、三五八―三八二。